

Special Support Education Research Center

SSERC 通信

(第7号—2007年12月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：前川 久男
 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
 TEL&FAX：03-3942-6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>
 mail：sserc@human.tsukuba.ac.jp

■ 巻頭言

「特別支援教育の新たな段階における現職教育を構想する」

安藤 隆男

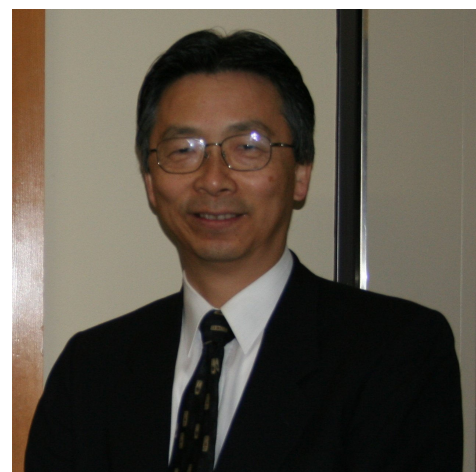
小中学校における特別支援教育の体制は、校内委員会の設置等の状況から着実に整備されつつあります。これまでの特別支援教育への転換に関わる精力的な議論と、広範な実践の積み上げに負うところが大きいといえます。特別支援教育元年と位置づけられる今、関係者は、これまでの取り組みの成果と課題を整理し、今後、特別支援教育の本質を踏まえた新たな展開を希求して行かなければなりません。

このような認識から、筑波大学特別支援教育研究センターは、新たな段階に入った特別支援教育の現職教育及び教員養成の充実に資するために、筑波大学障害科学系、附属学校教育局などの関係機関と連携して、以下の事業に着手することとなりました。

第一は、大学院修士課程教育研究科に『特別支援教育専攻』を設置したことです。①障害領域の専門性に特化した履修ピーク制の設定、②現職教員を中心とした大学院生の多様なニーズに応じた選択的プログラム導入、③学内資源、特に附属特別支援学校の活用、④教授形態におけるチーム・アプローチの採用など、高度な専門家養成をめざし、新たな発想の下でプログラムを開発しました。本プログラムの需要を見越し、東京キャンパス大塚地区における授業開設などを実現しました。

第二は、特別支援学校教諭免許状取得のための認定公開講座の開設です。盲・聾・養護学校教諭免許状取得の認定公開講座を実施してきた実績に基づき、さらに教育職員免許法の改正による新免許に対応した講座開設を行いました。今夏、すでに延べ千名の単位認定を行いました。

特別支援教育において筑波大学が培ってきた専門性とこれに寄与した資源の活用、協働により、私たちは、今後、わが国の特別支援教育における現職教育の一層の充実に努める所存です。関係者には、私たちの取り組みに関心をお寄せいただき、忌憚のないご意見を賜りたいと思います。



■ 【報告】派遣型現職教員研修システムの開発研究

— 視覚障害児童・生徒を対象とした自立活動（歩行）指導者研修会 —

現在、全国の盲学校においては、教員の人事異動等に伴い、教科および自立活動等の指導法の専門性を如何に維持・継承させるかが大きな課題となっています。多くの教員が自己の指導法等の力量を高めるために、教育委員会や大学等が主催する各種研修会や免許法認定講習会等への参加を希望しているにもかかわらず、出張に伴う時間的・経済的な担保に乏しく、研修ニーズを有する教員の期待に十分応えられないという状況にあります。

こうした問題の解決に向けて、「派遣型現職教員研修システム」の開発研究という目的で、2006年度は、3日間にわたって「視覚障害児童・生徒を対象とした歩行指導の基礎段階」の研修会を、2007年度は引き続きその「応用段階の指導法」を中心とした2日間（10月27日（土）～28日（日））の研修会を、長野県松本盲学校を会場に実施しました。

この研修会の企画は、筑波大学特別支援教育研究センターの重点事業の一つであり、昨年は附属視

覚特別支援学校の教員 3 名とセンター教諭 1 名の計 4 名を派遣し、15 名が受講しました。本年は附属視覚特別支援学校の教員 2 名とセンター教諭 1 名の計 3 名を派遣し、14 名の受講者がありました。また、開催に当たっては長野県教育委員会の後援を受けました。

今回実施した講師派遣型研修に関し、当該校の受講生から以下のような意見を複数頂き、概ね満足であったとの評価を得ることができました。

- (1) 講師が現地に赴くために、一度に同一校の複数の教員の受講が可能となり、当該校から教員を出張させる研修よりもコストが軽減できる。
- (2) 歩行指導のような演習中心の研修の場合、日常的なフィールドでの実践で指導力を高めることができる。
- (3) 現地環境に合わせた研修であることから、講師の助言に基づく当該校の歩行指導に関わる訓練地域の適正化やカリキュラムの見直し・策定が可能である。

掲載している写真は今回の研修会の演習場面の一部ですが、研修会全般を映像として記録しましたので、ご興味のある方はセンターまでご照会ください。また、こうした講師派遣型の研修会は、視覚障害教育以外の分野でもニーズがあると思われます。様々な障害種の特別支援学校に対しても同様の研修会を企画・実施することが今後の課題だと思われるので、現職教員研修のあり方についても併せてご意見をお寄せいただければ幸いです。

■ 【報告】第 7 回特別支援教育研究センター主催セミナーを開催

11 月 11 日、附属小学校の講堂にて、特別支援教育研究センター主催セミナーを開催いたしました。平成 16 年度からスタートした本セミナーも参加者数はのべ 1300 名を数え、特殊教育から特別支援教育体制への移行のなかで、社会の要請に応じて、実践成果と話題を提供し続け、今回第 7 回目を迎えました。

今回は、「特別支援教育の発進」と題したシリーズのもとで「場の教育から一人一人のニーズに応じた教育への展望と課題」をテーマにして、特別支援教育元年における現状と展望、課題を明らかにしながら、特別支援教育の内容と質を支える理論と実践の共有化を図っていくことを目的として開催しました。

北は北海道から南は九州まで、小・中・高等学校の教員、特別支援学校教員、教育委員会関係者、大学教員、保護者、学生など様々な立場の方の参加がありました。

午前中は、品川裕香氏（教育ジャーナリスト、教育再生会議委員）、朝野浩氏（京都市立西総合支援学校校長）、大前俊夫氏（大阪市立盲学校教諭）の三氏による基調報告を行いました。品川氏には、「『キミはキミのままがいい』だけでは生きていけない！～universal designed educationの実現に向けて～」と題して、通常学級における発達障害をはじめとした支援の必要な子どもたちをとりまく現状と課題を報告いただきました。朝野氏には、「障害種別の『場』を超える教育 - 京都市の総合支援学校の取組から見えるもの」と題して障害種を超えた学校の取り組みを紹介いただきました。そして、大前氏には、「みんなが集まるセンターを - 大阪市立盲学校の 15 年の挑戦 - 大阪市立盲学校が目指す特別支援教育と今後の盲学校の在り方について」と題して子どもたちの笑顔輝く教育活動とセンター的役割について報告いただきました。

午後は、三氏をパネリストにして、今後の教育の充実にむけたシステムおよび制度の整備について、通常教育を含めた学校教育の在り方について等、会場の参加者を含めて協議を行いました。

セミナー参加者からは、「大変勉強になり、参加した意義があった。」「未来を創造していく気構えや筋道をつくっていくヒントをもらった。」などの声と共に、次回への期待も寄せられました。



■ 【報告】平成 19 年度現職教員研修、前期研修成果報告会・中間報告会および修了式

9 月 28 日（金）、筑波大学東京キャンパス大塚地区第 1 会議室において、今年度の現職教員研修前期研修成果報告会、中間報告会および修了式が開催されました。9 月で研修を修了する高田宗享さん（静

岡山立沼津盲学校)、下山真弓さん(広島県立広島特別支援学校)の2名が6ヶ月間の研修成果を報告しました。また、1年研修を行っている7名の研修生および研究生は、それぞれ中間報告を行いました。附属特別支援学校の校長、副校長、教員の方にも参加していただき、活発な討議がなされました。報告会終了後、谷川教育長にご臨席いただき研修修了式を行いました。高田さん、下山さんは10月からそれぞれ静岡県、広島県に戻ります。筑波大学での研修成果を発揮して活躍されるように願っています。修了生の研修テーマは以下のとおりです。

- ・ 高田宗享(指導教員 藤原義博)
「個別の教育支援計画の作成に関する調査・研究」
～静岡県と他県市町の調査の比較を通して～
- ・ 下山真弓(指導教員 藤原義博)
「地域のセンター的機能を担う特別支援学校の役割と支援の在り方」
～通常学級に通う肢体不自由児の理解と支援を～



修了式で挨拶する高田宗享さん、下山真弓さん

【 現職教員研修 修了生の声「苦言・提言」 】

センター研修を終えて一年半。今は、毎日の授業準備や子どもの記録に追われる毎日。そんな中でも「学んできたことを話してほしい」と、知っている先生から声をかけていただくことがあります。特別支援教室担任者会や難聴児研修会など。講演という形で招いていただくので、まあ、張り切って行きました。しっかり原稿を用意して、つかみのネタをいろいろ考えながら…。でも、伝えるって難しい。人に話すって難しい…。

ろう学校に勤務し、毎日子どもと一緒に授業や活動をしなが、
「見てくれなきゃ伝えることもできないもんな…」と痛感しています。耳からだけでは伝わりにくい子どもたちに、しっかりと目を合わせて伝えること。

「筑波で研修してきた」なんて肩書きは子どもたちに見えやしない。子どもたちにとって見なくなる、聴きなくなる、わかりなくなる伝え方、授業、人間であるかどうか。

今、現場では語り合うべき人、場がたくさんあります。子どものことについて保護者や、医療、福祉や地域校の先生方と。また、学校の専門性や校名・児童数や環境について、県や職員会や同窓会、その他多くの方々と。「何を」言うかはもちろんですが、「どう話すか」も大切だなあと感じていきます。話す声、話す間、話す量、伝え方、聞き方…。

センターの熱い先生方の講義や雑談、附属でお世話になった先生方との相談や会話、研修生同士の秘密のおしゃべり、鈴木演芸場の落語、顔なじみになった近くの散髪屋や居酒屋…。伝えたい、語りたいたいことが膨らんで、あらためて研修の成果が試されています。



(平成17年度 修了生 長野県 長野ろう学校 丸山 秀樹)

【 現職教員研修 研修生日記 】

10月から11月にかけて、研修の一環として関東・関西地区の聾学校等を見学させていただきました。私は、自校で主に乳幼児教室を担当しているので、各校の早期教育担当の先生方から、地域の実情に応じた取組についてお話を伺いました。貴重なお話をたくさんいただいたのですが、その中で私がとても印象に残ったお話がありました。「“この学校があってよかった”と相談に来られたお母さんに言ってもらって…とても嬉しかったです。」「あるお母さんが“初めて相談に来た日、とても不安だったけど、先生が玄関で待っていてくれてとても嬉しかった”と話してくれました。」「年に何度かドッと落ち込むけれど…“子どもの初めて”に出会えるのは、この仕事の大きな喜びかな。」

恥ずかしながら、聾教育・早期教育について自身の経験も知識も十分ではなく、何もできない自分の至らなさに落ち込む毎日でした。でも、各地の先生方が悩みながらも一つ一つの相談に丁寧に対応し、振り返り、積み重ねられていることを知り、気持ちばかり焦って空回りしていた自分に気付かされました。様々な課題はありますが、その中でまずやってみる、精一杯取り組んでみるのが今の私に必要なことなのだと、改めて感じています。

行事の立て込む忙しい時期に、快く研修を引き受けてくださった各校の先生方、本当にありがとうございました。残りの研修も、多くの出会いに感謝し、背伸びをせずに自分の課題に向き合っていきたいと思います。

(秋田県立聾学校 佐藤 操)

スイカ定期券で改札をとおり、湘南新宿ラインで池袋へ。ホームでは電動車いすの青年(昔の!)が通勤中に女性の車掌さんと楽しそうに話している。携帯電話で電子メールのやりとりをしたり、インターネットで文献検索したりもできる。沖縄や鹿児島の先生方とeラーニングで講義を共に聞き、研究センターから帰る日には、エキュートでおかずを買う。(ちょっとエンゲル係数が心配!)こんな日々を当たり前のように送っていますが、学生時代には姿かたちもなかったものばかりです。でも相変わらず混雑している通勤電車から線路沿いに目をやると、昔のままの家並みやお店を発見することもあり、ゆっくり変わっていくものやスピード感あふれる早さで変わっていくものなど、時の流れの不思議さを感じています。時の流れといえ、同行させていただく幼稚園や保育園で「平成14年生まれ!」の5歳児に「おばさん!どこから来たの。」と言われたり、「〇〇ちゃんのお母さんでしょ。」と若いママ達と同じ??と一喜一憂。そんな日々はあっという間にすぎて、色づいた落ち葉が舞う季節になり、研修期間も残り何ヶ月と数える方が早くなりました。初任者の頃、障害児教育について「間口は狭いけど奥は深いよ。」と教えていただいたことがありましたが、「何をみればいいのだろう?」と知らず知らず肩に力が入っていたのかもしれない。「みるにも何種類ものみるがある。」「みえているものだけでは、みえないものもある。」と講義で聞いたあと、ちょっぴり肩がほぐれるようにほっとする今日この頃です。

(埼玉県立大宮北養護学校 大竹由子)

■ 巻末言

11月26日放映されたNHKスペシャルにっぽんの家族の肖像「里子・里親」は、知的障害の青年とその里親の家族の12年が紹介されたものだった。青年は職場に適応できずに過度に緊張して過ごしていた。開かれた職場の支援会議で彼は初めて自分の想いを語る。「施設では自分の気持ちを我慢するように言われてきた」。新しい環境の職場で生き生きと仕事をし始めた青年の表情は一変した。里親の母親は「あなたは、これもこれもこれもこれもできるんだよ。」と、できることはたった一つではないということを繰り返していた。障害は周りとの関係で重くもなり軽くもなる。そして周りが変われば本人も変わるし、本人も変わればまた周りも変わる。(庄)